

箕作省吾『坤輿図識』

—著者をめぐる1, 2の問題—

辻 田 右 左 男*

Some Problems concerning the Authorship of "Konyo-Zushiki"

(World Geography written by Mizukuri Family in 1845)

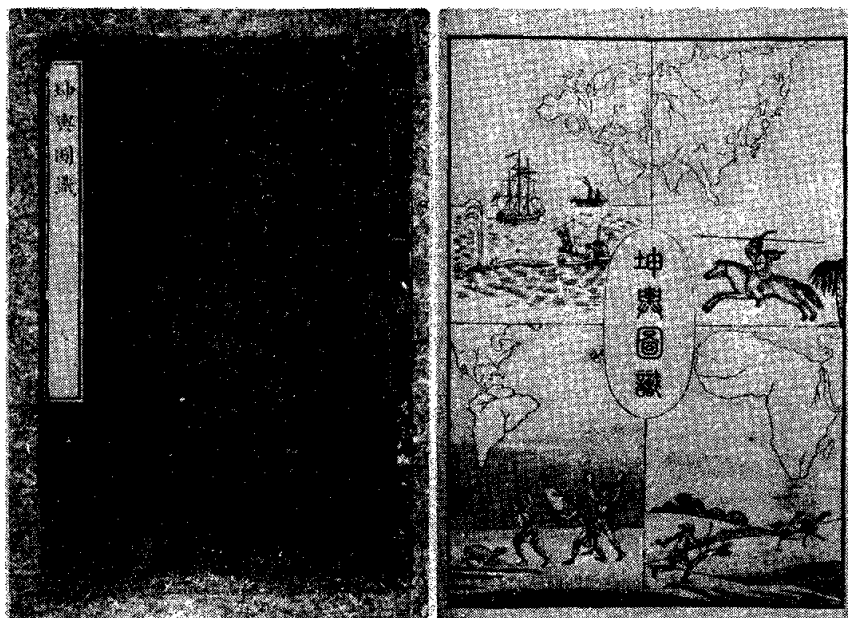
Usao TSUJITA

(1973年9月27日受理)

(1)

近代日本の黎明である明治維新の出発点は政治的にも社会的にも、19世紀30~40年代の天保期に求められるといわれる¹⁾が、それと符節を合するように、1845年(弘化2)地理学の上でも、十二分に近代とつながる画期的な名著『坤輿図識』が、弱冠25才の青年箕作省吾によって生み出された。この書物はおおかたの史家の注意の外にあるが、刊行されるやたちまち、幕末社会に大きいセンセーションをまきおこし、武士といわず庶民といわず当時の知識人に対し、国際知識開眼の書となった。

しかし世上の歓迎・喝采とはうらはらに、著者省吾はこの書物刊行の翌年、好評に答えて上梓するはずの続編を執筆中、咯血して急逝するという悲劇的なアクシデントが起きた。急きょ省吾の養父、当代随一の碩学箕作阮甫が嗣子の後を襲って『坤輿図識補』の完成を目指す、著者父子の微妙なからみ合い、その刊行年代をめぐって、いくつかの問題が想



第1図 『坤輿図識』表紙(左)と見開き(右) 筆者蔵

* 地理学研究室

定される。

筆者がこの書物の存在を知ったのは、すでに40年に垂んとする昔のことである。当時、筆者は幕末の学究吉田松陰に傾倒し、とくにかれの地理学研究に興味を感じたが²⁾、松陰の著述にあまりにもしばしば坤輿図識という書名の現れるのに奇異の念を抱いた。

松陰15, 6才の時、江戸から帰った毛利藩兵学師範山田宇右衛門が、江戸の土産物として図識を松陰に与えたことが動機となり、かれは慨然として天下の事に任ずる決意をしたという³⁾。その時以来、図識は松陰の座右の書となり、その続編が刊行された時など「坤輿図識補一見仕度何か術はあるまいか、だれか所持仕らざる哉」と家兄宛の手紙（安政元年11月27日付）で執拗にその入手方を懇願している。安政の大獄で処刑される前の年、安政4年（1858）の年初などは、例の松下村塾で2～3週間継続して弟子たちと図識の輪読に日を過ごした⁴⁾。高い識見をもつ稀有の読書家松陰を魅了したこの書物は、筆者にとっても憧憬の書となり、久しく一読の機会を願っていた。ところが、1970年1月8日たまたま図識3冊、同補4冊計7冊と付図「新製輿地全国」を入手し、仔細にその内容を検討する便が得られた。

図識はひとり吉田松陰を感激させただけでなく、幕末から明治にかけての有名人、たとえば鍋島斉正・井伊直弼・桂太郎等も激賞してやまなかった⁵⁾。山本四郎教授の名著『新宮涼庭伝』によれば、涼庭もまた図識の愛読者の一人であったという⁶⁾。

図識およびその著者については、学者一族⁷⁾といわれる箕作家の一員、阮甫の孫にあたる呉秀三博士がその著『箕作阮甫』（1914初版、1971復刻）において詳細に述べておられ、地理学の側からは、畏友故帖沢信太郎博士が『鎖国時代日本人の海外知識』（1953）のなかで、わざわざ「坤輿図識とその展開」という章を設けて解説されており、ほとんど間然するところはない。しかし図識を親しく手にとって繙くうち、上記の書物に記されていないいくつかの疑問が浮かび上ってきた。ここではそうした問題点を中心に、図識とその著者の人間像を新しい視角からながめてみたい。

(2)

後で述べるように、図識はその続編『坤輿図識補』（以下図識Bと呼ぶ）の後半をのぞき箕作省吾25才（満24才）の単独の書であるが、世上往々全巻が養父阮甫の作であると見る向きが多い。呉博士は阮甫の地理的著作のなかに図識をあげておられるし、齊藤月岑も当時流布していた世界地誌の書名を列記し、図識は箕作阮甫の作としている⁸⁾。この書物がはじめて上梓されたころは、たしかに阮甫の高名のかげに隠れて、省吾は無名の新人であったに違いない。しかし図識正編3冊（以下図識Aと略記）の読者には、箕作省吾という著者名が強烈な印象を与えたことと思う。

しかし順序として、省吾の養父、学者一族出自の源流となった箕作阮甫（1799～1863）について一言する。もちろん阮甫は幕末における第一級の医家・蘭学者・外交顧問・教育者であり、その社会的活動は多岐にわたるので、詳細にその業績を紹介する暇はない。ここでは阮甫の地理学的貢献だけに焦点をしばって考察を試みるが、地理学者としても当代稀有の逸材であったろう。従来の日本地理学史では阮甫の地理学を全然問題にすることはなかったが、それはかれの多角的文筆活動の輝かしさに幻惑され、1つの盲点となっていたものと思われる。

箕作家はもと近江の産⁹⁾、阮甫の数代前に美作国に移り、阮甫は24才ですでに津山藩侍医となっていた。まもなく上京して鍛冶橋畔津山藩邸¹⁰⁾に起居、学名のひろがるとともに

幕府の外交顧問となり、川路聖謨らに随行して¹¹⁾ロシア・アメリカの使節と接衝、条約の締結にあたったが、樺太の日・ロ国境を北緯50度線に画定した事実上の起案者は阮甫であったと思われる¹²⁾。教育者としては東京大学の前身蕃書調所の初代教授となり、実質的に同大学の生みの親であった。晩年には幕臣に取り立てられ、学者としての名声は全国にひろがり、養子省吾が阮甫の家塾に入門したのも、故郷陸中水沢の蘭学者坂野長安（高野長英の師¹³⁾）が阮甫の崇拜者で、長安から阮甫の偉大さを鼓吹されたからである。

阮甫が地理を好み、地理に精しかったことは、地理学者をもって自任する佐久間象山もこれを見とめていたし、しかもそれが「一朝一夕のことではなく」青年時代から「地理に心を潜めた」ことは、阮甫の若き日の漢詩をとおしてもうかがわれる。阮甫の詩は新宮涼庭が高雅であると評した¹⁴⁾が、その地理的な詩の1つを津田左右吉博士もその著書のなかで引用されている¹⁵⁾。そのほか、日本人が地理学に無関心なのを露骨に慨嘆する詩もある。

さらに「阮甫の前半生は医学の研究に費され、後半生は地理・歴史・兵学等の著作に専念した」と呉博士がいわれるように、かれが手を染めた学問は多岐にわたったが、なかんずく内政外交の指針となる地理学をもっとも重要視したことは疑いの余地がない。こうしてかれの著述にかかる地理書は15点に上り¹⁶⁾、専門別にみるとかれの家業である医学書に次いで多い。また『地質弁証』『地殻図説』『密涅利羅義』(Mineralogie)など地質関係の著書も5点あり、今日でも用いられている地質・地殻などの用語は阮甫のこれら著書に由来する¹⁷⁾。



第2図 『地球説略』中表紙(左)と見開き(右) 筆者蔵

以上、20点の地理関係書に加えて、幕末から明治初期にかけ、中国から舶載された中国語の地理書に、阮甫が訓点をつけ、校訂したものが数種類ある。有名な魏源編『海国図志¹⁸⁾』や徐繼畲著『瀛環志略』などがそれである。また筆者蔵の合衆國榊理哲著述『地球説略』3巻(1860刊¹⁹⁾)にもはっきり「大日本箕作阮甫訓点」とあり、阮甫の校訂によることはたしかであるが、箕作一家の智囊を結集して編まれた呉博士の『箕作阮甫』に『地球説略』の文字が全然見当たらないのはふしぎである。

このように幕末の一時期にいわゆる「唐渡り」の地理書が多数流通したのは、蛮社の変などで、従来盛行したヒュベネルはじめ蘭学系統の地理書が後退しつつあったからである。語学としてもオランダ語より英語のほうが重視される傾向が芽生え、福沢諭吉などはこの移行期の風潮を最も敏感に捉えた一人であるといわれる。大阪の緒方塾でオランダ語を学んだ諭吉は、英語を学ぶつもりで上京、阮甫の出仕していた蕃書調所に来て阮甫から入所を許可されたが、諭吉は調所所蔵の蘭英辞書を借り出すのが唯一の目的であり、これが不許可になると調所に未練はなく、その日限りで退所したと、自伝のなかで語っている²⁰⁾。

この蕃書調所時代、阮甫は同所にあったオランダ地理書やオランダ雑誌 *Nederlandsch Magazijn* (図識B序の「採用西書目」では子-デルランセマガセインとあり、1834~56年分が調所に蔵されていた²¹⁾) を盛んに読み、とくに雑誌のなかの地理の論文は精力的に翻訳した。その成果が『玉石志林²²⁾』であり、幕吏という自覚から、阮甫の名前は出していないが、おそらく阮甫の外国地理論文集であったと推測される。この書物に収められた25篇の論文は、既往の地理書には見られなかった高水準のもので、19世紀における地理学の巨匠カール=リッターの書物からの引用もある。「支那の香港島」「黒海」「パリの地下道」「無人島徒民記」などは地理学に造詣の深い阮甫ならではの絶対に書けなかった格調の高い諸編である。

(3)

以上述べたところから、箕作阮甫を幕末最大の地理学者と呼びたいが、阮甫がおそらく地理学の後継者に擬していた養子省吾の地理学的業績はどうであろうか。

箕作省吾(1821~1846)は、旧姓佐々木、号は玉海、仙台藩陸中水沢の下級武士の子として生れ、母は清人の女であったという。16、7才のとき、故郷を後にし、いったん江戸に落ち着いて立身を夢みた。たまたま同郷の先輩高野長英を知人の宅で垣間見、かれの弟子とならんとしたがる所あって断念した。そのときの印象を「高野長英はルス(ロシア人)にあらざるか」とあとで省吾は語ったという。それから京都に出て儒学を修める傍、西南日本を隈なく旅行し、いかなる高山巨川も省吾が足跡を印しないところはなく、かれの「地学の精」は旅行より生じたという²³⁾。非常な危険を冒してでも、踏破を志した高山は必ず登頂し、徹底的に地形の調査にあたった。当時、省吾の地理学の指導者はとくになかったと思われるが、みずからの意志と方法で、field work を累積していった。省吾もまた生れながらの地理学者 *born geographer* といえるが、青年時代の訓練が数年後、単なる翻訳ではない画期的な地理書として結実したのであろう。

20才ごろ一時故郷水沢に帰ったが、郷里の先輩のすすめで上京、阮甫の門に入り、山野の跋涉で鍛えた肉体をまともにぶっつけて、当面の課業である蘭学と医術の学習に精進した。しかし省吾は、かれの半世紀前の先学、『増補采覧異言』の著者山村才助(1770~1807²⁴⁾)と同様、蘭学を学びつつも、地理学への志向・傾斜は隠し切れなかった。このことが阮甫の歎心をゆさぶり俗なことばでいえば、地理学が取りもつ縁で、阮甫は門人省吾を箕作家に迎える決意をした。世界地理に精通した渡辺華山が自殺した天保13年(1842)省吾に箕作姓を名乗らせ、ここに44才22才というダブルスコアの親子が誕生した。その後2年、阮甫は弱令13才の三女しん²⁵⁾を省吾に娶わせ、名実ともに箕作家の養子となった。

同じ年(1844)これまた画期的な世界地図といわれる「新製輿地全図」(以下図Cと略称する)が省吾の名前で刊行された。これは阮甫みずから蒐集した内外の地図数葉を省吾に与えて校訂させ、出版の運びとなったもので、阮甫とすれば愛婿への養子縁組の引出物

とした感が深い。

(4)

図Cはたちまち識者の好評を博したが、翌弘化2年図Cの説明書のような形で刊行されたのが図識A 3冊(天・地・人)で、図識という書名自身この書物の性格を物語っている。如上の家族関係から 勘案すれば、図識Aは養父阮甫が御膳立をし、呉博士の言のように「筆と心とを労した」ことは事実であろう。しかし、養父阮甫の社会的地位・蔵書・学識を背景としながらも、筆者は敢えて図識Aは純粋に省吾の著述とみなしたいのである。

箕作家の人となっていてすでに5年、最初は、「家巖」阮甫の言に拳拳服膺したであろう省吾も、図識A執筆の段階では地理学上の学力も向上、世界を見る目にも磨きがかかり、いつまでも虎の威を借る狐のような存在でありたくなかった。みずから参考書を選び、みずからの発想と体系で著述を完遂したかったであろう。このことは図識Aのあと1年前後で発兌された図識Bの序文のなかで「意は独成に在り、人に倚りて以て事を成さんことを欲せず」と省吾がはっきり言い切っていることばに徴しても明かである。一方ではかれの著作と平行してみずから宿痼と呼んだ肺結核が進行していたが、病がつののと比例してかれの自立心も強くなり、学問的な潔癖が芽生えていったものと思われる。

図識Aにおける省吾の authorship はその綿々切々、訴えるような、哀願するような序文を見るだけでも明かである。かれはこのなかで、「7種類23冊の外国文献を見たが、その間に異同があって、自分はそれを取捨する能力がない。国ごとに違う距離や面積の単位も自分を当惑させる。とくに自分が気遣うのは資料の古さであり、自分の用いた7、8年前の西洋書は資料としてはすでに古い。況んや15、6年前の書物を使えば、実際は50~60年前の陳腐な事実を紹介することになり兼ねない。これを補うために自分としては常に最近の資料を探し求め、入手の度にこの本を補正したい」と語り、病気のせいか、きわめて nervous になっている。しかしここでも今日的 up-to-date な学問である地理学の本質を的確に捉えていたかれの学識が遺憾なく現れている。

ただし先輩が最も多くの頁を費したヨーロッパの記事は図識Aでは最小限にとどめ、その代わりに従来全然論及されなかった豪斯多辣里洲(アウスタラリ)諸島はできるだけ詳細に記述したというあたりは、かれの反骨精神の現れである。そしてこのような世界各大陸の処遇のバランスを読者に汲みとってもらえば、自分の地理書も成功したといえる(「輿地之学思い半ばにすぎる」)だろうと最後にちょっぴり自信をほめかしている。

省吾の書くように、この図識Aに至ってようやく日本の地理書に豪州大陸が登場し、6大陸完備の地誌となる。18世紀の初頭以来間歇的に刊行された日本の世界地理書は、150年を経たこのときはじめて今日的地誌のレベルに引き上げられた。ただし豪州の資料としては、自尊心の強い省吾も、養父阮甫のさきに訳して置いた『豪斯多辣利訳説』(82葉の自筆本)に依存せざるを得なかったであろうし、この部分だけは阮甫作といわれても仕方のないところである。図識Aにおける豪州の記事の反響は大きく、吉田松陰などはいち早く豪州を孫子の兵法と直結して弟子に講述し、この大陸は孫子が九地のなかで説く争地あるいは交地の類であるとした²⁶⁾。また「幽囚録」のなかでは、日本の南に、海を隔てて近いこの大陸に日本人はどうして今日まで気づかなかったのであろうとなげいている²⁷⁾。

図識Aは枚数にして3冊計160「程度、今日にすれば文庫本1冊ほどの分量であるが、既往の地理書の慣例になっていた fabulous (寓話的)な説話はいっさい払拭され、記述は簡潔でいかにもすがすがしい。わが国の世界地理書では初出と思われる fresh な項目も

いくつかある。たとえばモンスン・オアシス・パンパス・共和州(合衆国)などがそれにあたり、とくに共和という文字の使用はこの書物が日本最初であったという。淡々と叙述しながら、ところどころ省吾自身の高見が批歴されているのを見るのは楽しい。たとえば南米の南端パタゴニアは、山村才助の『増補采覧異言』以来長人国といわれているが全然根拠はない。パリの博物館にあるその地方の土人の衣服を見るときとなるほどアジア人からすれば長人であるかも分らないが、長身のヨーロッパ人が長人というのは穏当ではないという類である。またアメリカ大陸はコロンブスが発見したのに、あとで行ったアメリゴの名を取って呼ぶのはおかしい、アメリカと呼ばずコロンブス州(閣竜洲)と総称すべきだという見解もさわやかである。なおアンデス山脈の項ではアレクサンダー=フォン=フンボルト(ヒュンボルト)が登山したことが記され、スイスではベスタロッチー(ベスタロン)、豪州ではキャプティンクックやかれに随行した植物学者フォルスター(本草家ホルステル)の名前まであげられている。この書物は後述の地図Cを付録としたということもあるが、なによりも記事の新鮮さゆえに当時の読者を随喜せしめたのであろう。

二十年後に現れる福沢諭吉の啓蒙的地理書『西洋事情』(1866~69)や『世界国尽』(1869)の爆発的人気には比すべくもないが、図識Aが19世紀中葉のベストセラーズの1つであったことは明白でこれとともに省吾の名も全国に喧伝されたであろう。とにかくこの書は「売れて売れて」それまで窮迫していた箕作家の経済がおおいにうまったという。好評噴々、続編を求める声も高まり、箕作家では急きょ図識B発刊に踏み切った。

しかし箕作家に迎えられたという責任感から来る重圧、心身をすりへらした地図Cの校訂、さらには画期的な世界地誌の執筆、このような無理がたたって省吾は病魔の巣喰うところとなり、図識Bの企画がなされても、とうていそれを完成できるような状態ではなかった。それにもかかわらず、家族友人の助言を振り切り、独力で図識Bの執筆を強行したのは荒れ狂う大海を小舟で踏破しようという勇敢な航海者にも似、悲壮感がただよう。予期されたように図識B 2、亜細亜誌補を執筆中「俄然咯血、紅雲稿を染め」前途多難を思わしめた。その後小康を得て、省吾が計画していた「部帙は完成に至り、余意中之喜び知るべきのみ」とあるから、省吾の原稿は一応完成していたと見るべきである。しかし病床のこととて、もはや原稿を推敲する気力はなく、自分でも不出来であると二度もくりかえし記している。「寒い冬が去り、暖い春が来て、万が一、病気が再発せず、生きる望が生じたなら、早速校正の仕事に着手したい」という悲願も空しく、弘化3年冬12月省吾はついに不届の客となった。

(5)

死を目前にしなが、弘化3年晩秋にしたためた序言のなかで、頑ななまでに、図識Bの「独成」を念願した省吾の素志はそのままの形で実現したであろうか。通説によれば図識Bの刊行は弘化3年であり、省吾の死没は12月13日であるから、省吾は生前にこの書物の刊行を見届けることができたはずである。余命いくばくもない自分の病状から、省吾も我を折り、養父阮甫の共力を素直に容認し、省吾の原稿に阮甫の旧稿が上積みされて図識B 4冊が完成し、省吾は生前これを手にとり、満足して瞑目したとすればなにの問題もない。逆縁ながら子の欠を親が補って完成した親子リレーの美談として、いつまでも語りつがれてよいことである。

しかし事実はこれとかなり異なっていたと信じられる。図識B 4冊の文字を刻んだ彫工は各巻別人であり、4冊が平行して印刷されていた事情が考えられる。急いでやれば、年

内に刊本となり、省吾がこれを見届けることもできた。しかも省吾のような病気の場合、最後まで意識がはっきりしているから、手に取ってなにらかの意志表示をし、その情景が近親の人の記憶に残り、のちのちまで伝えられたはずである。かりに省吾が刊本を見たとしたら、自分の意志に反して夾雑物が入りこんだ書物を喜ぶよりも、むしろ苦々しい思いでながめたであろう。阮甫もこれが省吾に対する残酷物語であることを知っていたから、このような状況を回避するために、故意に刊行をおくらせ、省吾の霊前に書物を捧げる形になったのではあるまいか。

図識B弘化3年刊行という説は、おそらく省吾の序文の「弘化丙午之晩秋念六夜」という日付を見て呉博士が不用意に弘化三年出版刻本と記されたことから固定したものである。しかし仔細に見ると、図識B1の見返しには「弘化三年丙午鑄」とあるだけで、図識Aのように「弘化二年乙巳刊行」とは書かれていない。すなわち版に彫んだのはたしかに弘化3年であるが、この年に刊行されたという保証はない。信頼すべき年表といわれる大槻如電『新撰洋学年表』（1927刊）はこの事についていずれとも明記していないが²⁸⁹、これを増訂した佐藤栄七『日本洋学編年史』（1965刊）には、はっきり図識Bの刊行は翌四年とあり²⁹⁰、筆者の推定がはじめてここに立証されたことになる。これとは別に鮎沢信太郎氏は図識Bのうち「終りの第4巻は弘化4年11月刊行となっている」と記されているが²⁹¹、筆者蔵のB4にも、また京都市立西京商業高校の蔵本²⁹²にもそのような記述はなく、鮎沢氏が何を根拠としてこれを記されたか、故人となられたいまは、同氏についてたしかめるすべはない²⁹³。

しかし図識Bの全部あるいはその最後の1巻（B4）が省吾の死後弘化4年に刊行されたとすると、次のような状況の可能性も生れる。

すなわち、図識Aは前述のとおり飛ぶように売れた。図識Bも刊行しさえすれば、売れることは目に見えている。それにしては省吾の書いた原稿だけでは分量が少なすぎる。同じ出すならもっと分厚なものの方がよい。このためには頁数の水増しを計らねばならない。日ごろ書き溜めて置いた手稿は山ほどある。このとき、ふと、学人阮甫先生の脳裡に、商魂にも似た一種の迷いがひらめいたのではなかろうか。

といっても、地理書であるから、木に竹をつぐような見え透いた真似はできない。B3では苦肉の策として、広い意味では地理の分野に入るヨーロッパ列強の陸海軍の兵備の様子をながながと載せ、さらにB4は「本編中所収人物略伝」という名目で、実際には地理学と直接関係のないアレキサンデル大帝・アリストテレス・ペートル大帝・ナポレオンの詳細な伝記で埋めて刊行した。文体・内容ともに省吾の作と異なるB4は、さすが他の6巻のように「箕作省吾著」とすることを憚り、「箕作省吾編」としているが、省吾著となっているB3のヨーロッパ州補も後半は明らかに阮甫の旧稿である。ところどころ「寛（省吾のこと）按スルニ」という注を入れているが、これは省吾の作であることを印象づける一種のカムフラージュではなかったか。現にB3の23丁に「余ガ訳スル所ノ外蕃通史ニ就テ見ルベシ」とあり、阮甫が馬脚をあらわしたともいえる。いうまでもなく若い省吾にこんな著書のあったはずはなく、阮甫の旧稿が訂正されることなくここに残ったのである。明日が知れない瀕死の病人が、いかに義務感に駆られたとしても、煩わしい列強の兵備のことを数十葉にわたって書けるはずはない。ことに図識Aではヨーロッパのことは世上に周知されており、最小限度にとどめると言明した省吾であるから、B3のヨーロッパは大部分阮甫の筆と見てよい。

阮甫は決して悪をなしたのではない。ただ fair でなかっただけである。図識B3、4

が阮甫の作とすれば、なぜその旨を明記しなかったのであろうか。図識全7巻を通じ、阮甫という文字は一言半句もない。親子揃ってワルツの作曲家として知られ、それぞれ箕作父子より4~5才若いだけで、全く同年代に生きたヨハン=ストラウス父子³³⁾のように、図C、図識Aの出版によって箕作 junior 省吾の名声は一時父阮甫を凌ぐものがあつたのではないか。吉田松陰の書翰にも省吾の名は見えるが、阮甫のことは「玉海(省吾)の父」として書き捨てられている³⁴⁾。付度すれば、図識に阮甫の名を出せば、書物の売れ行きに影響すると阮甫は考えたのではなかろうか。とにかく省吾が心血を注いだ図識AおよびBの前半に比べてBの後半は冗長で、精彩を欠いている。呉博士は、「図識は省吾の名で出版されたのであるから、阮甫の著述とは云はれないが、之に就いて阮甫の筆と心とを勞したことは少ない。阮甫の著述と云うてもよい位のものである」と記されたが、これは阮甫に対して、鼠屎の引き倒しだったと言えるであろう。時代はもはや阮甫から省吾に移っており、省吾が書いたから、新鮮さが躍動していたのである。

図識Bも省吾の執筆分は依然みごとである。B1は「輿地総説」と名付け、いわゆる地理学通論が展開されている。当時ヨーロッパで議論が沸騰していた造山運動や洪水説が一部分紹介されている。化石の有無によって山地を祖山・嗣山・季山と三大別したのは、20世紀になって合衆国の地理学者デヴィスの提唱した「地形の輪廻」(幼年期・壮年期・老年期)とやや発想が似ている。現代にもつながる海水の汚染をかなり詳しく述べ、塩分がこれを浄化し、火山がこれを掃除している。それゆえ火山は「汚物掃除釜」と呼ぶべきかといっている。卑語を弄しない学究一途の省吾が珍しくここでリラックスしているのは、おそらくかれの病が小康を得ていた時であつたらう。

B2のアジアの補説も地理書特有の難渋さはなく、きわめて軽妙に筆を運び、数頁にわたる万里の長城の説明も読者に息をつぐ暇を与えない。中国はなにもかも文化が進んで羨しいが、ただ地理の学がおくれているのは残念であると2度もくり返し述べ、省吾には常時地理学が意識されていたことを察知させる。このあたり省吾の筆は軽快に働いていたが、その後間もなく悲劇的な終焉が訪れた。

(6)

最後に、時期的には最も早く制作された「新製輿地全図」について一言しなければならぬ。縦35.5、横120.5cmの大きさを持ち、決して大図とはいえず、むしろ瀟洒な地図といふべきであるが、みごとな銅板印刷で、当時としては内容的に最も優秀な世界図だったと鮎沢信太郎博士も折書をつけている³⁵⁾。地図そのものとしても一級品であるが、図識の名にふさわしく、一級品の地理書図識Aとワンセットにして売り出したのであるから、まさに錦上添花の感があり、異常な歓迎を受けたことは当然である。

この付図がある代わりに、図識A・Bにはいっさい地図のカットは載っていない。図識以前の世界地理書には、西川如見の『華夷通商考』に見るように、巻中に小縮尺の地図を何枚か挿入する³⁶⁾のが通則であったが、図識はこの点においても新機軸を出し、幕末社会を驚かせた。省吾はこの図の序言でフランスの地図に範を求め、旧図(高橋景保の「新訂万国全図」と推定される)を参照して作ったというが、標記にもかれの創意がにじみ出ている。おそらくかれは、数葉の地図を照合しながら、一点一画もゆるがせにしない科学者の冷静さでこの作業をすすめたであろう。この地図が出たことによって、長久保赤水以来多数出ている地図は東にして捨ててもいい位であると芥藤馨(竹堂)が評した³⁷⁾のは、決して過大評価ではない。

優秀でもあり、好評でもあった箕作省吾の図識と付図には当然のこととして、たちまち多くの偽版が現れた³⁸⁾。これらを含め、当時刊行された外国地理関係書は、汗牛充棟の多きを数え、江戸では世界地図を買うための行列がつづいたという³⁹⁾。いかに幕末の社会に地理的知識が要求されていたかが分るが、その間にあって箕作省吾の著作は群をなして連なる地理書の山並みの上にひとときわ高くそびえ、燦然と光り輝いていたのである。生前地理を愛して各地の山川に親しんだ省吾は、死してもその靈魂が相変わらず山野を駆けめぐっているだらうという友人杉田成郷の弔詩⁴⁰⁾があるが、かれの鋭敏な科学的良心、高邁な地理学的精神はいまなお生きて、現代日本の地理学の後輩に奮起を呼びかけているような気がしてならない。

む す び

以上、多少屈折した推測を多用しながら、従来閑却視されていた『坤輿図識』の地理学史的意味とその成立事情の一端を述べた。地図を無視した地理書、たとえば編者青地林宗が自嘲的に「乾誌」と呼んだ『輿地誌略⁴¹⁾』などの地理書が横行した時代に、みごとな世界地図を地誌の旗識としてかかげた省吾の地理学はまさにオーソドックスな地理学であった。地理学の歴史には、往々20代、30代という青年学徒の手によって樹立された輝かしい金字塔があり、その学問熱心がかれらを夭折せしめたともいえる。省吾はこのように地理学のために生き、地理学のために死んだ典型的青年学徒の一人であった。

しかし、この場合、省吾を称揚する余り養父箕作阮甫先生を冒瀆するような不遜の言があったことをみとめざるを得ない。しかしこれによって箕作阮甫の偉大さは少しも損耗することはない。ここでは図識成立過程における1つの可能性を仮説として提示したにとどまり、もちろんこれ以外の状況の設定もあり得ることである。切に識者の御叱正と御教示を仰ぎたく思う。

なお、この小文は1972年6月9日、奈良大学で行なわれた奈良地理学会総会で述べた会長就任演説に加筆したものである。

注

1. 岡本良一「天保の改革」岩波『日本歴史』近世5, 1964.
2. 拙稿「吉田松陰と国防地理学」, 京大『地理論叢』11, 1940.
3. 玖村敏雄『吉田松陰』1936, 21頁.
4. 吉田松陰「丁巳日記」, 『吉田松陰全集』所収。なお拙著『日本近世の地理学』1971, 259頁参照.
5. 呉秀三『箕作阮甫』1971複製版, 189頁.
6. 山本四郎『新宮涼庭伝』1968, 92頁.
7. 箕作麟祥, 同秋坪, 同元八, 菊地大麓, 呉文徳, 同秀三, 石川千代松, 長岡半太郎, 坪井正五郎, 同忠二等, 一族約200名が数年ごとに親戚会を開いているという(一族北島常道氏談話による).
8. 斎藤月岑『武江年表』東洋文庫版, 2, 138頁。ただし編者不詳の「西洋学家訳述目録」(『文明源流叢書』3所収)ではABCとも箕作玉海の著としている。なおこの書で「医院録験」の著者として取り扱われている児玉省吾も岩手人とあるから、これも省吾らしい節がある。
9. 近江源氏の後, もと佐々木氏と名乗る。愛知川の南の箕作山に築城した。
10. 省吾の著作もこの藩邸でなされ, 正・補とも「鍛冶邸夢裡樓南窓之下識」という序がある。
11. 川路の『長崎日記』には阮甫の名前が見える。川路は一時奈良奉行もつとめた。なお川路の外国思想については山本四郎氏の論文がある(ヒストリア11号, 1955)。
12. 呉, 前掲書, 53頁以下。

13. 高野長運『高野長英伝』1953, 60頁.
14. 山本四郎, 前掲書, 92頁.
15. 津田左右吉, 『文学に現はれたる国民思想の研究』, 第4巻, 1955, 494頁.
16. 呉, 前掲書, 125頁.
17. 望月勝海『日本地学史』, 1948, 88頁.
18. 全100巻, 幕末知識人の必読書, 吉田松陰も愛読したが, 佐久間象山は「図志」のなかの砲術の項は「兇戯に等し」と酷評している. 阮甫の校訂は数巻だけである(筆者蔵).
19. 米人教師 Richard Way が中国人のために中国語で書いたもの. 一時旧制第一高等学校や京都府立一中の地理の教科書となっていた. 偽版が多い. 拙稿「地球説略について」京都新聞, 1969, 1月15, 16日号.
20. 福沢諭吉『福翁自伝』, 岩波文庫版, 101頁.
21. 日本科学史学会編『日本科学技術史大系』1, 通史1, 44頁. もちろん阮甫のみでなく省吾もこの雑誌を利用した.
22. 『明治文化全集』16, 「外国文化篇」所収.
23. 大槻盤溪の碑文による. 呉, 前掲書所収.
24. 杉田玄白『蘭学事始』岩波文庫版51頁に「天性その才備はり, 殊に地学をこのみ, 専らその筋を専精せしが, 白石先生の采覧異言を増訳重訂して十三巻の書を訳撰す」云々とある. なお鮎沢信太郎『山村才助』(人物叢書)1969.
25. 阮甫には3女あり, 男子はなかった. しんは千万子ともよばれ, 省吾との間に一子眞作麟祥を設けたが, 省吾の死後, 亡姉の夫眞作(旧姓菊地)秋坪の室となり, 娘なほを設けた. なほは坪井正五郎氏夫人となった.
26. 吉田松陰「孫子評注」, 『吉田松陰全集』4, 437頁以下.
27. 同「幽囚録」1891, 11頁(筆者蔵). なお『吉田松陰全集』1, 581頁以下, 「豪州は気候もよく, 草木繁茂し, 人民も榮えているから, 人の争い取る所であったが, 英夷が開墾し, 占拠している. しかしまだその土地の十分の一を占めるだけである. 吾常にあやしむ, いやしくも吾先きに之を得ば, まさに大利あるべし」とあり, 多少危険な南進論が顔をのぞかせているが, 「幽囚録」は地理に立脚したみごとな国防策で, 地政学的論文といえる.
28. この書には, 弘化元年の条下に図識A・Bを載せているが, 省吾の序文を記すのみで, 刊行年代にはふれていない.
29. 同書502頁, なお岩波版『国書総目録』もBの刊行は翌4年と記す.
30. 鮎沢信太郎, 『鎖国時代日本人の海外知識』177頁.
31. 京都市立西京商業高校『京都市立西京商業高校所蔵, 洋学関係資料』Ⅲ, 1969, 232頁. この書物にはA, Bについてそれぞれ3頁にわたる解説がある.
32. 鮎沢氏はその著書を一作ごとに筆者に贈られた. 筆者と親交があったが, 勉強が過ぎ, 40歳代で長逝された.
33. 親子とも Johann Strauss と名乗る. 父は1804~49, 子は1825~99, 父は子を音楽家にしたくなかったが, 子は父にかくれて音楽を修業, 父を凌ぐ大作曲家となる. Walzerkönig (ワルツの王様)といわれ, 「青きドナウ」などの名曲がある. Encyclopaedia Britannica, Vol. 21, 1965, p.464~5. なお, T. M. Finney, A History of Music, 1935, p.507.
34. 吉田松陰が阮甫の地理書『八紘通誌』3冊を評したことによると「右坤輿図識正統編ニ視レ候事ヲ著シ候書之由眞作玉海カ父ノ著シ候書ニ御座候」嘉永4年7月22日付, 叔父玉木文之進宛, 『吉田松陰全集』5, 62頁.
35. 鮎沢, 前掲書, 242頁.
36. 西川如見『華夷通商考』(室永版)1708(筆者蔵). なお司馬江漢は『地球全図略説』(1793)などで地図中心の世界地誌を試作している.
37. 『坤輿図識』人(A3)末尾「書輿地全図後」の文中にある. 地図Cの右方にある大槻崇の序

文と同じ日付（甲辰南至日）であるから最初図Cのための序文として書かれたが、図Cにスペースがなく、本文の末尾に載せたとも考えられる。

38. 鮎沢，前掲書，180頁以下。
39. 齋藤月岑，前掲書，138頁。
40. 『輿地誌略』（1826）のなかで林宗は「大地誌ノ地図ヲ要トスル関係最大ニシテ徒ニ目ヲ悦ハシムルノ具トセズ。若地誌ヲ作テ地図ヲ製セザル者足乾誌ニシテ聴ニ足ラズトセン」と述べている。（拙著，前掲書，186頁）
41. 外国ではワレニウス，日本では才助，省吾，松陰，最近では小沢儀明，吉村信吉氏などが想起される。

Summary

Konyo-Zushiki (World Geography with Map), appearing in 1845, one of gloomy years succeeded by political violences and turmoils, was a peculiar and an epoch-making geographical work in Japan. It contained the newest informations of foreign affairs, chiefly translated from the geographical books of Dutch origin, and was welcomed by both intelligent and patriotic Japanese. The author of this book (A.) was clearly Shōgo Mizukuri, 24 years by age, though backed by his father-in-law, Genpo Mizukuri, a famous scholar at the time. In 1846, when the enlarged editions (B.) of this book were requested by people, Shōgo suddenly died by lung disease, having had written some parts of Book B. So, his father planned to succeed his son's work, putting his old manuscripts, somewhat fittable to son's themes and published them in the end of 1946 or short time later. This means that the publishing date was whether before or after Shōgo's death. This paper deals very delicate situation of perplexing mind of Genpo, and aimed to discriminate the authorship between father and son, by some evidences of humanistic and economic sides.